



Title	懷徳堂文庫にたたずんで
Author(s)	片山, 良展
Citation	懷徳. 1983, 52, p. 4-5
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90608
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

懷徳堂文庫にたたずんで

懷徳堂記念会理事

片 山 良 展



大正五年、享保年間から明治のはじめまでは、一世紀半の間、大阪の文教の中心となり、独特の学風をもって大きな足跡を残した旧懷徳堂の精神を二十世紀に生かすべく、財団法人懷徳堂記念会によって、大阪市東区豊後町の府有地を借用して重建懷徳堂が復興された。爾来約三十年間この堂は、懷徳堂先賢の業績を顕彰し、市民を対象として文化・教育活動を行う場として、記念会関係者のご努力と各界識者のご協力によって活発に運営されてきたのであるが、昭和二十年三月十四日の大阪空襲で、講堂と事務所は烏有に帰してしまった。ただ不幸中の幸いは、大正十五年に増築されたコンクリート造りの書庫が焼けのこり、中に収められた三万六千余冊の蔵書その他が被災をまぬがれたことである。

昭和二十三年、大阪大学にはじめての文科系学部として法文学部が設置され、翌二十四年にはこれが文学部と法経学部に分れた。この年、懷徳堂記念会の蔵書全部が大阪大学へ寄贈され、同時に、昭和二年から三十六年まで懷徳堂記念会理事長の任にあたられた小倉正恒氏と当時の大阪大学総長今村荒男氏との間で、今後の懷徳堂記念会の事業の運営は大阪大学と協力して行うことが合意された。爾来この方針は、各界の方々のお力添えを得つつ、今日まで三十数年間継承されている。旧懷徳堂の学問の本流とはつながりの薄い外国文学などを専攻する私のようなものが、大阪大学の一メンバーとして、懷徳堂記念事業の運営の一端を手伝わせていただいているのは、右のようなご縁からである。

懷徳堂記念会から寄贈された旧蔵書は「懷徳堂文庫」と名づけて大阪大学附属図書館に保存管理されており、その全貌は昭和五十一年に大阪大学文学部から公刊された「懷徳堂文庫図書目録」によって知ることができる。門外漢である私は、もとよりその内容について論ずる資格も能力も持たない。それでも時おり、図書館書庫棟第六層の貴重図書コーナーに、ひもとく人の訪れを静かに待ちながら

整然と並んでいる万巻の蔵書の姿を眺めに行くことはある。量的に多いのはなんといっても漢籍であるが、懷徳堂先賢の著作を含む国書も多数ある。また懷徳堂関係の古い記録や遺品もある。これらはすべて、江戸時代百数十年の懷徳堂の歴史の中で、さらには明治末以来懷徳堂記念会とその指導者たちの手で、蒐集され、著述され、記録された、先人の精神的営為の一大集積である。これらを見てみると、一種の感動のようなものが湧きおこってくる。

「私は本の虫ではないが、図書館の蔵書を見てみると、ときに深い感動に襲われることがある。ひっそりとそこに並んでいる精神の財宝たち。そこには、感情、告白、大胆な思想、苦しみぬき、生命があがなわれた知識、カオスの中から戦いとられたフォルム——それらのなんと雄大な総和、人間の営為のなんと巨大な世界が納まっていることであらう。まさに、蔵書を見ると私は、ときとして星空を仰ぐに似た気持を覚えるのである。」

これは私が長年研究対象にしているドイツの文豪トーマス・マンの言葉であるが、懷徳堂文庫の書架の谷間にたたずむときに私を襲う感動はこれと同質のものである。それは時のへだたりを越え、専門の違いを越えた、人間の精神的営為への畏敬である。しかしこの畏敬はまた、創造の原動力にもなりうる。それを可能にするものは、時代を越えた人間どうしの精神的対話であると私は思う。右のトーマス・マンは多読家で、その読書目録には古典と呼ばれるものも驚くほどたくさんはいつている。鉛筆を片手に、マンはそれらを読みあさった。これが彼の過去との対話のしかたであった。そこからさまざまなものが拾われ、消化され、結合され、組みたてられて、彼の作品の中に融けこんだ。そしてそれらの作品はすべて、ひとりの誠実な二十世紀人の、二十世紀の現代に向けての提言となったのである。

懷徳堂文庫の内容的、学問的評価は、私としては専門家にゆだねるほかはないのであるが、試みにたとえば漢籍のあれこれをそっと開いてみると、ある書物にはかつて一心にこれを読んだであらう人のいれた朱点が鮮やかに残っている。流麗な細字で欄外に書きこみをしたものもある。これらもまた、その時々々の現代に生きていたかつての読者が、今をいかに生きるべきかを問いつながらおこなった、過去との真剣な対話の跡である。伝統の中に創造を計るとは、先人の精神的営為への畏敬を大切にしつつ、その精神の真髓を現代のために生かし、さらに未来に向ってそれを発展させる道を講ずることであらう。このたび発足した懷徳堂・友の会の後援を得て、懷徳堂記念事業が新たな充実の秋を迎えるにあたり、一言所感を述べさせていただく次第である。